4剝5
2·422
1

序

夫和歌のそもそもはいとはるけし
一字をきくにあらねども
神明仏陀感応冥感にかなふ
神仏前にさげまつる
古今雅の上手
星とよみ
を重と云
歌聖と

仙人伝

仙人伝撰集に孫市の撰ときき人知集しる今を世の都市人うつ
ことわざをおきさまとなる花ろに者
影和名乃しるあ者市と伝して俗話
をあらう　児同あきめ　ようふ　結志ゆんとも
ようし　結ら　眼前の　ものもれ御教を
市をのもし

人丸は人の国角里人と天智
天皇に仕へ奉る三位と家の
名なりて柿の木あるを一ぬ柿なと
とるこうや

吉今
左
柿
の
くと

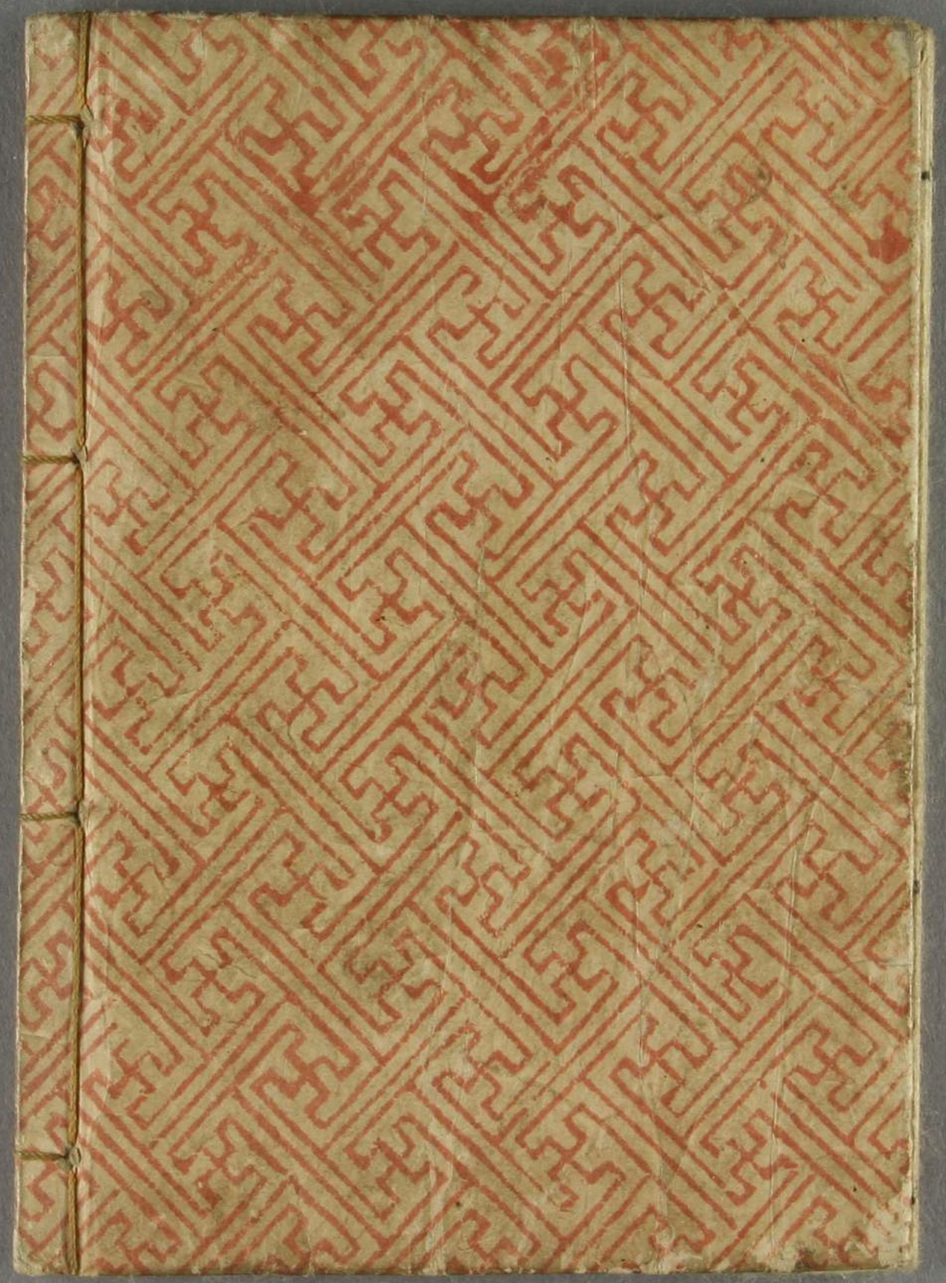
貫之が歌に
後五位上
紀貫之
右
二
掃ちる
庭の
木の葉の
風に
寄せて
ちらして
志ら絲の
雪ぞ
ふりける
四

弱冠ハ甲斐の小間物商ひ
延享七年正月十三日
行氏の孫諶利うゑ
九ハ性こ

九
九の図 弱冠

右
伊勢三梅
いうあ
ゆるく年
年
ゑとも

あつ
ぬる人も
なりしと
ゑは

大和ゐ従五位上藤原後藤の娘く
ちしめハ伊勢ちゑにしりて娘を
伊勢と号をとゝうや

家持ハ大納言大伴旅人の子なり
従二位　征夷大将軍之万葉集乃
撰者ニ三ツつもの肉なり